

九州アメリカ文学会第70回大会プログラム

期 日：2025年5月10日（土）、11日（日）

会 場：長崎大学 文教キャンパス 環境科学部本館（10日）

グラバー園 旧スタイル記念学校2階（11日）

<第1日目> 5月10日（土） 会場：長崎大学 文教キャンパス 環境科学部本館 A-23 番講義室

開会式

13:00-13:10 竹内 勝徳（鹿児島大学・九州アメリカ文学会会長）

研究発表

13:10-13:50 大島 由起子（福岡大学） 司会：長岡 真吾（福岡女子大学）
「「森の息子」たちの脆弱さとレジリエンス——Frederick Douglass と William Apess」

13:55-14:35 志水 智子（九州産業大学） 司会：鈴木 章能（長崎大学）
「二人のオデュッセウスの帰還——Albuquerque における Anaya の試み」

映画上映

14:40-15:05 『女の叫び』（*The Lonedale Operator*, 1911）

研究発表

15:10-15:50 Greg Bevan（福岡大学） 司会：中村 嘉雄（九州大学）
“Artistic Vision and Madness in Robert Stone’s *Children of Light*”

15:55-16:35 渡久山 幸功（琉球大学） 司会：中村 嘉雄
「アメリカ人にとってのコンタクト・ゾーン沖縄
——現代アメリカ小説における沖縄と米軍基地——」

特別講演

16:40-17:40
西谷 拓哉（神戸大学）
「作中挿話と両義性
——メルヴィル、シェイクスピア、そしてセルバンテス——」
司会 竹内 勝徳

総会

17:45-18:15
九州アメリカ文学賞授賞式

懇親会

18:30-20:30
会場 長崎大学 文教キャンパス 生協食堂（会費：一般会員5000円、学生会員3000円）

参加申し込みは以下の URL より4月末日までにお願ひします。

（懇親会予約フォーム） <https://forms.gle/9BwQf1qJC8GKeVXp7>

（2日目会場のグラバー園入園のための本大会専用入園券もこの URL でダウンロードできます。）

<第2日目> 5月11日(日) 会場: グラバー園 旧スタイル記念学校2階

*2日目会場のグラバー園に入園する際は、本大会専用の入園券が必要です。上記の懇親会予約フォームで入園券をダウンロードできますので、プリントアウトして持参ください。

シンポジウム

10:00-12:00

「Southernization of America?

— New Southern Studies から読み解くアメリカ南部文化—」

司会・講師 樋渡真理子 (福岡大学教授)

講師 早瀬博範 (宮崎国際大学教授)

講師 江頭理江 (福岡教育大学教授)

閉会式

12:50-13:00

大島 由起子 (次期九州アメリカ文学会会長)

長崎大学 交通アクセス

所在地：〒852-8521 長崎市文教町 1-14

JR 長崎駅から

路面電車：

「長崎駅前」電停から、「赤迫」行きの1番・3番系統の路面電車で「長崎大学」下車、徒歩すぐ

長崎バス：

「長崎駅前」バス停から「時津」「滑石上床」「長与」など1番系統の長崎バスで「長崎大学前」下車、徒歩すぐ

長崎空港から

県営バス：

「長崎空港4番のりば」→（昭和町・浦上経由長崎方面行き）→「長大東門前」下車、徒歩すぐ

お車でお越しの皆様へ

原則として300円の入構料が必要となります。正門より入構し、守衛室にて所定の手続きを行ってください。なお、タクシーで来学された方は入構料が免除となりますので、そのまま入構できます。

長崎大学 会場案内



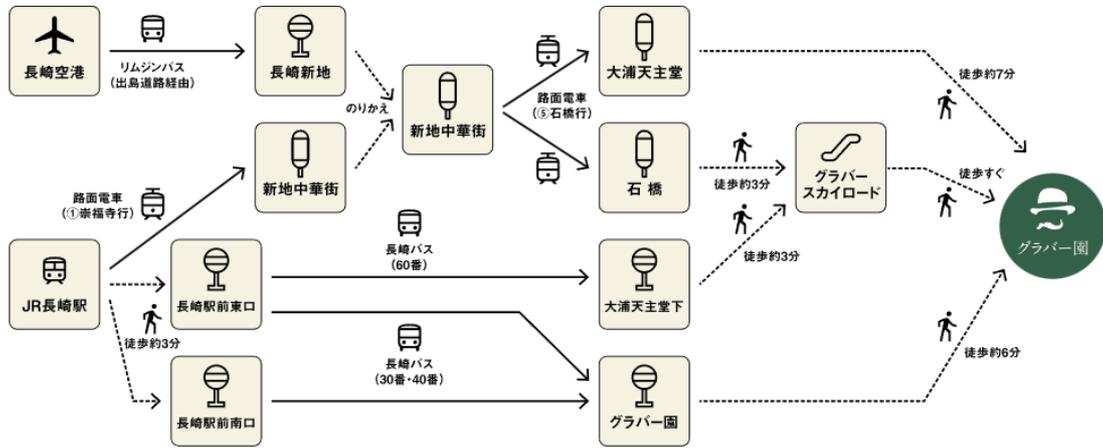
「環境科学部本館」の正面入口を入り、斜め右前方にある階段を2階まで上ってください。

階段を左に曲がった教室の並びに、A-23 番講義室があります。

エレベーターご使用の場合は、「環境科学部本館」の正面入口を入り、右側の通路を進んでください。少し行くと左手にエレベーターがあります。

グラバー園 交通アクセス

所在地：〒850-0931 長崎県長崎市南山手町8-1



グラバー園 会場案内



「森の息子」たちの脆弱さとレジリエンス
——Frederick Douglass と William Apess

大島由起子 (福岡大学)

「レジリエンス (resilience)」は、接頭語「re- (再び)」と「salire (跳ぶ)」が組み合わさったもので、ラテン語“resilire”に由来する。この語は、十七世紀頃には素材の弾力性を指した。その後、脆弱性の対として、逆境から弾力性をもって立ち直る回復力を示すようになった。十九世紀の有色人種は、人間性を破壊する差別のもたらす脆弱さに呻吟させられたから、レジリエンスの跳ね返るような力なしには到底生き抜けなかった。

本発表では、十九世紀アメリカで人種差別撤廃のために戦った双璧といえる活動家、黒人の Frederick Douglass と北米先住民 Pequot 族の William Apess を取り上げる。両者の知名度の落差ゆえ不均衡な扱いになってしまうが、著名なダグラスについては、あえて従来あまり注目されてこなかった、彼の自伝の中であって異物混入の感を残す巫術の根についての箇所にも焦点を絞る。十六歳のとき、ダグラスは奴隷調教師である白人のコヴィーに殴り勝つ。この勝利は、ダグラスが、自分が奴隷から人間になった転機だと述べているとおりの名場面であるにもかかわらず、その勝因となると、今ひとつはっきりとしないのである。発表では、巫術の根が気迫のコヴィー打倒に繋がる淵源だと見る。エイプスについては、「先住民文学の父」と称される割には未だ知名度が低いといわざるをえないので、ダグラスとの交差を意識しつつ、人生の概要を述べる。さらに、二人を交差させ、二人のメソディスト派との関わり、そしてアメリカ独立記念日についての二人の演説、すなわちエイプスの最後の作品 *Eulogy on King Philip, as Pronounced at the Odeon, in Federal Street, Boston* (1836) とダグラスの “What to the Slave Is the Fourth of July?” (1852) を論じる。

*vulnerability and resilience, son of the forest, declaration of independence

二人のオデュッセウスの帰還——*Albuquerque*における Anaya の試み

志水 智子 (九州産業大学)

Rudolfo Anaya の *Albuquerque* (1992) において、チカーノの青年 Abrán は、ある日突然自分の生みの母の存在を知らされ、その臨終に呼び出されたことから、自分の民族的ルーツを明らかにするために実の父を探し出そうと約3週間奔走する。物語は彼と友人 Joe が作家 Ben Chávez と出会い、さらには生母を看取る病院で恋人となる Lucinda と出会う日から始まり、彼の父探しの紆余曲折を経て、始まりの日と同じ病院で、実父と判明した Ben と恋人や友人が彼を囲む場面で終結する。いわば3週間の旅を経た Abrán は旅の始まりにおいて共にいたのと同じ人々に迎えられる場所へと帰還を遂げていると言える。主人公が冒険や試練を経たのち、故郷へと帰ってくるというストーリーの形を「リターンモチーフ」と定義するならば、この物語は「リターンモチーフ」の原点ともいえるホメロスの『オデュッセイア』のオマージュとしてとらえることができる。Anaya 文学の中で『オデュッセイア』のモチーフが繰り返されることについては水野敦子はその「ホメロス、ジョイス、アナーヤ<チカーノ・ユリシーズ>に見る環大西洋的想像力」(山陽女子短期大学紀要 39, 2018)の中でも指摘しているが、本研究では Abrán と Ben という二人のオデュッセウスに対応する人物が互いを発見し、また帰還することによって「リターンモチーフ」がループしている意味に注目し、チカーノのルーツ探求に意義を見出そうとする Anaya の試みを考察したい。

Abrán は実の父を探すことで自らのルーツを探求し、Ben は息子を探すことで未来を探求する。彼らが互いを発見することはルーツの探求が未来の探求であることを示唆するのである。二人が体現するループする「リターンモチーフ」からは、アルバカーキ社会における、民族性の違いを超えて人々が共有できる将来の重要性が読み取れるのである。

数行の英語の要旨：

There are two “Odysseuses,” Abrán and Ben, searching their father and son, who represent their ethnic root and future in *Albuquerque*. Through their adventure, we can understand Rudolfo Anaya described repeating return motifs to suggest the importance of common aims in Chicano society.

Artistic Vision and Madness in Robert Stone's *Children of Light*

Greg Bevan (福岡大学)

The late American novelist Robert Stone (1937-2015) is best remembered for the gritty realism and sweeping post-Vietnam social commentary that powered his National Book Award-winning *Dog Soldiers* (1975) and the Pulitzer finalist *A Flag for Sunrise* (1981). This has left critics puzzled by—and generally dismissive of—his fourth novel *Children of Light* (1986), the claustrophobic tale of a Hollywood screenwriter and his affair with an actress on the very brink of her sanity.

That Stone himself was raised by a schizophrenic single mother, and saw in her fractured vision a kind of muse, should invite a reexamination of *Children of Light*. Moreover, the decade in which it was published saw the first real stirrings of the ongoing debate about the future of literature in an increasingly visual culture. The relevance of Stone's novel to this debate is clear from its inspiration in his struggles as a screenwriter adapting two of his novels into films.

But it is Fredric Jameson's seminal 1984 essay "Postmodernism, Or, The Cultural Logic of Late Capitalism," that provides the key for understanding the significance of *Children of Light*. Jeremy Green summarizes Jameson's insight: "The emblematic postmodern experience is that of the schizophrenic, for whom meaningful unities of perception, subtended by the continuity of conscious identity, are broken apart, splintered into fragments of heightened sensory experience." Using Jameson's theory of the postmodern, this discussion will aim to present *Children of Light* as a cautionary foreglimpse, conceived a decade before the advent of the Internet, about the culturally schizophrenic age in which we find ourselves today.

Keywords: 20th century American literature, postmodernism, realism, insanity, cultural studies

アメリカ人にとってのコンタクト・ゾーン沖縄
——現代アメリカ小説における沖縄と米軍基地——

渡久山 幸功 (琉球大学)

2025 年は第二次世界大戦の終結から 80 年にあたる。沖縄は、中国、北朝鮮、ロシアといった (旧) 共産主義国からの抑止力として「太平洋の要石」とみなされ、この 80 年間で日米安全保障条約の下、米軍基地は沖縄に集中的に駐留し続けている。アメリカ (戦勝国) と日本 (敗戦国) の関係は、21 世紀に入って、ますます緊密になっており、理想的な両国関係を構築してきたが、沖縄がこの理想的な同盟関係にとって極めて重要な役割を果たしてきたことは、多くの米軍関係者が沖縄に駐留してきたにもかかわらず、また、インターネット時代にもかかわらず、アメリカ国民にはますます知られなくなっている。そのため地元住民による反米軍基地運動へのアメリカ国内の理解は深まることはない。

本発表では、沖縄を主な舞台とする *Above East China Sea* (Sarah Bird 2016) と *Gaijin* (Sarah Z. Sleeper 2020) の二つの小説を分析し、米軍と共存せざるを得ない沖縄の人々や沖縄のコミュニティーを、アメリカ人作家がどのように描写してきたかを明らかにしたい。これらの作品は、主人公たちが個人的な答えや記憶、アイデンティティを求め、異文化にショックや感銘を受ける旅行記と呼ぶことができるだろう。しかし、同時にアメリカ外交政策や文化に大きく影響を受けている沖縄はアメリカ人にとっての文化接触 (コンタクト・ゾーン) となっており、沖縄社会、文化、慣習、叡智、人生観、人間関係の意味と対面することにより、母国アメリカの本質 (特に外交政策・米軍海外展開) を理解することの助けとなっている。小説内で鋭く描かれる偏見や差別が、異文化の相互理解の必要性を感じさせる文学成果であると同時に、排外主義や自国中心主義になっている現在のアメリカ人にとって、沖縄・日本を理解する重要な社会派トラベル・ライティングとなっている。

Key Words:

Okinawa, The US Military Base, Travel Writing, Contact Zone, Postcolonial Literature

作中挿話と両義性

——メルヴィル、シェイクスピア、そしてセルバンテス——

西谷 拓哉 (神戸大学)

ハーマン・メルヴィルは海洋ロマンスの作家として出発したが、第3作の『マーディ』(Mardi, 1849)以降、とりわけ『白鯨』(Moby-Dick, 1851)において創作に対する意識を高め、『ピエール』(Pierre, 1852)、『信用詐欺師』(The Confidence-Man, 1857)といった後期作品では、「真実」を語る者としての小説家のありよう、あるいは小説の言葉の真実性を当のその作品内で論ずる(疑問視する)までに至る。この事態は作中で用いられる挿話の扱いに顕著に認められ、挿話のあり方にメルヴィルの創作観や小説形式に対する意識が如実に表れているのである。

『タイピー』をはじめとする初期の長篇小説は基本的には島巡りの話であり、エピソードが団子状に繋がるという構造を持っている。ところが、『白鯨』、『信用詐欺師』では挿話の扱いがさらに巧妙になり、プロットだけではなく作品構造とも密接な関係を持つようになる。『白鯨』では、初期の長篇の構造を受け継ぎながらも、中間に「タウン・ホー号の物語」という重要な挿話が置かれている。この小さな物語は小説全体の縮図でもあるが、同時に話の提示にあたってイシューメールは複雑な操作を行ない、意味を多重化させる。『信用詐欺師』に至ると、より挿入の度合いが高まり、同軸状に複数の別の話が埋め込まれ、入れ子構造が極限に達する。しかも、挿話の語り手が交代し、登場人物の「真実」を提示するかと思われた挿話が逆にそれを分からなくさせてしまう。

このような挿話によって両義性を生み出すメルヴィルの手法はどこに由来するのだろうか。『信用詐欺師』の中で語り手は「独創的登場人物(オリジナル・キャラクター)」という話題に触れ、ハムレット、ドン・キホーテ、ミルトンの『失樂園』のサタンの三者がこれに当たると述べている。これを創作上の影響に関する自註と読めば、メルヴィルは『ハムレット』と『ドン・キホーテ』における劇中劇あるいは挿話の扱いに範をとったとも考えられる。『ハムレット』の劇中劇において現実と虚構の境界線が崩れていく。メルヴィルは『信用詐欺師』において行為と演技が不可分であることを示しているが、劇中劇という手法をヒントとし、それを物語内挿話という形式に転用した。また、小説内により小さい挿話を置くのは『ドン・キホーテ』をはじめとする旅物語によく見られる手法である。牛島信明は、レオ・スピッツァーが『ドン・キホーテ』について提唱した“linguistic perspectivism”という概念を援用し、セルバンテスの「異説形成」について論じているが、これはメルヴィルにも十分当てはまる考え方である。メルヴィルの小説形式に対する意識、また、その作品における両義性の創出は、この二人の作家に淵源をもつのではないか。これを仮説として提示し、皆様からのご意見を賜りたい。

Southernization of America?

—New Southern Studies から読み解くアメリカ南部文化—

本シンポジウムは、アメリカ南部文学とアメリカ全体とを接続する一つの試みである。1990年代から2000年代にかけて旧来の南部研究に対して変革を求める動きが南部の歴史や文化、そして文学を研究する批評家たちによってもたらされた。その新しいジャンル開拓の動きは広義に New Southern Studies と呼ばれている。本シンポジウムでは、New Southern Studies をキーワードにしながら南部が現在のアメリカにどのような影響を与えているのかをアメリカ南部文学を手掛かりに考察することを目論んでいる。

Imani Perry が *South to America: A Journey Below the Mason-Dixon to Understand the Soul of a Nation* (2022) において“Paying attention to the South—its past, its dance, its present, its threatening future, and most of all how it moves the rest of the country about—allows us to understand much more about our nation” (Introduction xix) と述べているように「アメリカを理解するには南部文化を理解することが重要」であることは論を俟たないが、南部文学・文化を中心に、いまなお語られていない移民労働や人種主義の読み直しなどもアメリカを理解するために必要であろう。

アメリカ南部文学を手掛かりにアメリカを理解するための方法は様々考えられる。今回は、さまざまなアプローチの中でもとりわけ *Absalom, Absalom!* (1936)、*Go Down, Moses* (1942)、スノープス三部作をとりあげ、記憶、語り、文化の混淆の空間として捉え直し、フォークナーの小説世界の脱神話化を試みる。また、Mark Twain と南部という形で、*Adventure of Huckleberry Finn* (1884) を逃亡奴隷 Jim の視点から書き直した Percival Everett の *James* (2024) の語りの考察も示唆に富むものである。さらに、労働をキーワードにして、南部文化批評や南部について書かれた小説空間においてこれまで取り上げられることのなかったアジア系移民の労働が小説にどう表象されているかに着目する。

もちろん、アメリカという巨大な存在の全貌を解明することは誰の手にも余る作業である。それでも、アメリカ南部文学という一角から、アメリカを理解するための新たな視点を提供し共有することができれば、本シンポジウムの目的は達成されたことになるだろう。

The Faulknerian South vs. the Real South

早瀬 博範

New Southern Studies の火付け役の一人である Michael Kreyling はその著 *Inventing Southern Literature* (1998) の中で、“If Faulknerian power could inflate southern literature as a whole, it could also suck the air out of the jar, leaving writers starving for autonomy,” (xvi) と述べ、南部文学研究の課題の一つとして、“speculating on the use and abuses of William Faulkner as our Major Figure” (xiv) を挙げている。これは、南部文学はフォークナーという存在によって、アメリカ文学の中で大躍進を遂げ重要視されてきたが、あまりにフォークナーの存在が大きくなりすぎて、フォークナーこそ南部、南部といえばフォークナーという状態になり、それ以外の作家や作品が見過ごされがちになっていたことへの警告である。とりわけ、21世紀を迎えた現実の「南部」は多様化し、グローバル化しており、南部白人のノスタルジックな視点や敗北と記憶に重きを置いた従来の「南部像」とはかけ離れている。よって、伝統的な「南部」という枠組みを越えようとする視点での南部文学の

読み直しは確かに必要であり盛んに行われ、具体的には、*The Postmodern Sense of Place in Contemporary Fiction* (2005)、*Where the New World Is: About the U.S. South at Global Scale* (2018)、*Southern Literature, Cold War Culture, and the Making of Modern America* (2020)、*Insiders, Outsiders: Toward a New History of Southern Thought* (2021)などの批評書は、南部文学研究に新たな広がりや奥行きを与えていることは確かである。

この現状を踏まえつつ、フォークナーの描く「南部」は、現実の南部とは異なるからといって切り捨てるのではなく、あまりに「神話化」されすぎたきらいがある「南部」の脱神話化を図り、再度、新たな視点で分析を行う必要がある。New Southern Studies では、南部という土地が固定化された実体ではなく、記憶・語り・文化の混淆の場として機能する。南部を「地理的」ではなく、「文化的・歴史的空間」として捉える視点である。

本発表では、このような New Southern Studies の視点から具体的に *Absalom, Absalom!* (1936)、*Go Down, Moses* (1942) や *Snapes* 三部作などの作品に描かれる「南部」という「空間」の分析を試み、さらにそこから、フォークナーの「空間」の概念が、本質的にどのようなものであるかを明らかにしたい。

Percival Everett の *James* に見える語りの特徴から南部文学を考える

江頭理江

アメリカ南部文学とアメリカ全体との接続の観点から考えた時、*James* は良い素材となろう。本書は、*Adventure of Huckleberry Finn* に登場する奴隷の Jim の視点から物語の語り直しがなされている。そもそも我々は Jim が James であるかもしれないと考えたことがあるだろうか？*Huckleberry Finn* を Huck であると捉えることと、Jim が James ? と考える事との間の隔たりは大きい。

語り手は Jim であり、*Huck Finn* において、Huck 自身が一人称で語ることと同じ形式を取るが、語りと会話体との言語スタイルの差は、Huck よりも大きい印象である。Jim の語りは、クールで、基本的には方言など使わず、文法も整っている。

南部を舞台にした上述の二つの物語において、二人の視点から物語が進行する。語る人物は異なるが、一人称での語りという同一のスタイルを取る。この一人称スタイルでの語りは、その後の南部の物語、たとえば「A Rose for Emily」において、複数形の一人称、町の人々が語りとして登場し、「私たち町の者」が Emily の部屋に押し入る、あの場面につながるのではないか？いや実は、東部を象徴する *The Great Gatsby* (1925) において、登場人物の Nick が一人称の視点で *Gatsby* を語る、あの物語へとつながるのではないか？一人称の語りの視点から南部の物語を捉え、形式にあらわれる共通点に注目すると、語られるストーリーが多様であろうとも、結局我々は、アメリカ文学という特徴ある世界に行き着くのではないか。アメリカに対する見方もより深まるのではないか？このテーマを、フロアの皆さんに是非問いかけてみたいと考えている。

アメリカ南部における労働力の変遷——アジア系労働者への視点

樋渡真理子

William Faulkner の後期の小説 *The Town* (1957) には、それまで主として黒人たちが担ってきた洗濯業を独身の中国人男性が行うという時代の変化を Charles Mallison が回想する場面が登場する。また、Cynthia Kadohata の YA 小説 *Kira-Kira* (2004) では日系人強制収容所から解放されたと推測される日系の家族がジョージア州に 1950 年代に移住し、養鶏場で働きながら生計を立てるようすが子どもの視点から描かれる。同様に、韓国系アメリカ人映画監督の Lee Isaac Chung による半自伝的な映画 *Minari* (2020) においても 1980 年代にカリフォルニアからチャンスを求めてアーカン

サウス州の養鶏場で働く韓国系アメリカ人一家が描かれている。かつて奴隷制度をその基盤とし、農本主義を誇ったアメリカ南部が、農業だけではなく養鶏と鶏肉ビジネスに変化を遂げていく中で、労働を支えたのは黒人だけではなく、アジア系の人々であったことが南部を舞台とした小説にどのように表象されているのかを論じる。このように、南部における労働力の担い手の変遷に着目することで、右翼化していく世界、また、保守化していく現代アメリカにおける移民の労働について New Southern Studies の観点から考察する。